

性犯罪調書 汚された女性たち 第一話

公開排泄強要

体験版

制作／人工美少女製作所

ふあつときゃつとDX

序章 許可されないトイレ、公開排泄まで秒読み

「イヤアアアアアツ！ 早くトイレに行かせてえツ!!」

私は全裸のまま四肢を拘束され、強烈な便意に耐えていた。

必死で暴れてはみるものの、ギチギチとベルトが食い込むだけだ。

「駄目に決まってるだろお？ 俺は『それ』が見たいんだからなあ、ヒヒツ」

目の前で、お尻の穴を凝視しているこの男は、私を誘拐した張本人だ。

会社帰りに襲われ、この廃屋に監禁された。あれからもう七日が経つ。

「くうううううっ！ もうっ！ が、我慢がっ……!!」

最初にこの場所に拘束されてから、ずっとこのままだ。つまり、もう七日間トイレに行っていない。

大きい方はまだしも、小さい方……オシッコは既に散々漏らした後だ。

無機質なコンクリートに、扇状にいくつものシミができています。

そして、もう肛門の方も限界だ。お尻の穴が徐々に広がり、シワが一本ずつ伸ばされていく……。

「ビビッ、そろそろ限界みたいだなあ。俺だけじゃなく、みんな見てるぜえ……」

そう、見ているのはこの男だけではない。目の前にはカメラが置かれている。

男が言うには、この光景がリアルタイムでウェブ配信されているというのだ。

その証拠に、カメラの脇に置かれたノートパソコンには私の姿が映し出されている。

映像の上には、沢山の文字が高速で流れていた。

「裏サイトだから人数は少ないけどなあ！ それでも、もう三百人以上集まってるぜえ!!」

(さ、さん……びやく……にん……そんな……私が排便するところ……全部見られちゃうの……？ ……アッ!!)

不意に身体が、ガクツガクツと震える。もう、お尻の穴は、もたない。

「イツ、イヤアアアアアアアアアアアツ!! 見ないでええええええええええええツ——!!」

第一章 恥辱、事情聴取の始まり

警察署内の小部屋に通されてから数分、私は椅子に座り、じっと待っていた。机と椅子しかない殺風景な部屋だ。さらに数分待っていると、足音が近づいて来た。

——ガチャツ!

「お待ちさせて申し訳ありません。本日はご足労頂き、有難うございます」

「いえ……大丈夫です……」

「刑事課、強行犯係の真鍋信也まなべしんやです」

そう言いながら、真鍋さんは名刺を差し出して来た。

「どうも……」

ぎこちなく名刺を受け取る私。名刺を受け取るのは苦手だ。

「電話でも、お伝えしましたが、本日お越し頂いたのは、先日の事件の事情聴取の為です」

「お辛いでしようが、犯人逮捕のためにも、ご協力をお願いします」

「は、はい……わかりました。それで、何からお話すれば……？」

事情聴取など生まれて初めての私は、少し身を固くした。

「では、調書を取りますので、まずはお名前と年齢、職業をお願いします」

「はい……かけぬまたえこ影沼妙子、二十一歳……野中商事で事務をしています……」

大学を中退して、なんとなく入った会社だ。特にやりたいことがあった訳ではない。

「わかりました、お名前の漢字はこちらでよろしいですか？」

「はい……大丈夫です」

祖父につけられた名前だ。地味な名前。名字も暗い印象で嫌いだ。

「では、事件について最初から、出来るだけ詳しくお願いします」

「はい……わかりました」

私は、忌まわしい事件の記憶を辿り始めた――

第二章 誘拐

(はあ……きょうも、また遅くなっちゃった……)

私は家路を急いでいた。時刻は午後十一時三十四分。そろそろ日付が変わってしまう。

同僚の中でも特に仕事が遅い私は、かなり遅い時間まで残業することがある。

幸い、自宅は徒歩で通勤できる距離。時間にして十五分ぐらいだろうか。

今の会社を選んだのも、単に近かったからだ。

(後もう少し……帰ったら、お風呂に入ろ……)

そう思いながら、あまり街灯のない、薄暗い路地に入った時だった。後ろから足音が近づいてきた。

この路地は人通りが殆どない。人とすれ違うことも稀だ。

少し気味悪く思いながらも、私は家路を辿る。

(……あれ?)

——なにか変だ。

身長が低い私は、かなり歩幅が狭い。大抵の人は私を追い越して歩いていく。

裏路地とはいえ、すれ違えないほど狭い訳ではない。だが、足音は私にピッタリくっついてくる。

(もしかして……ストーカー!?)

生まれてこの方、モテた試しなどないのだが、それでもストーカーキングされない理由にはならない。

万が一の事を考え、駆け出そうとした瞬間——

「んむっ!!」

突然、目の前にヌツと伸びてきた掌に口を塞がれてしまった。

「んっ! んんうっ!!」

「静かにしろ……」

耳元でドスの利いた、低い男の声が囁く。

私は恐怖のあまり、腰が抜けてしまった。

「おっと……」

男は軽々と私の体を支える。

「そうだ、黙ってりゃ、命までは取らねえからよお……へへッ」

——ギチッ!

「あぐっ!」

男が両手で私の首を思い切り絞め上げてきた。

(こ、殺されるっ……!)

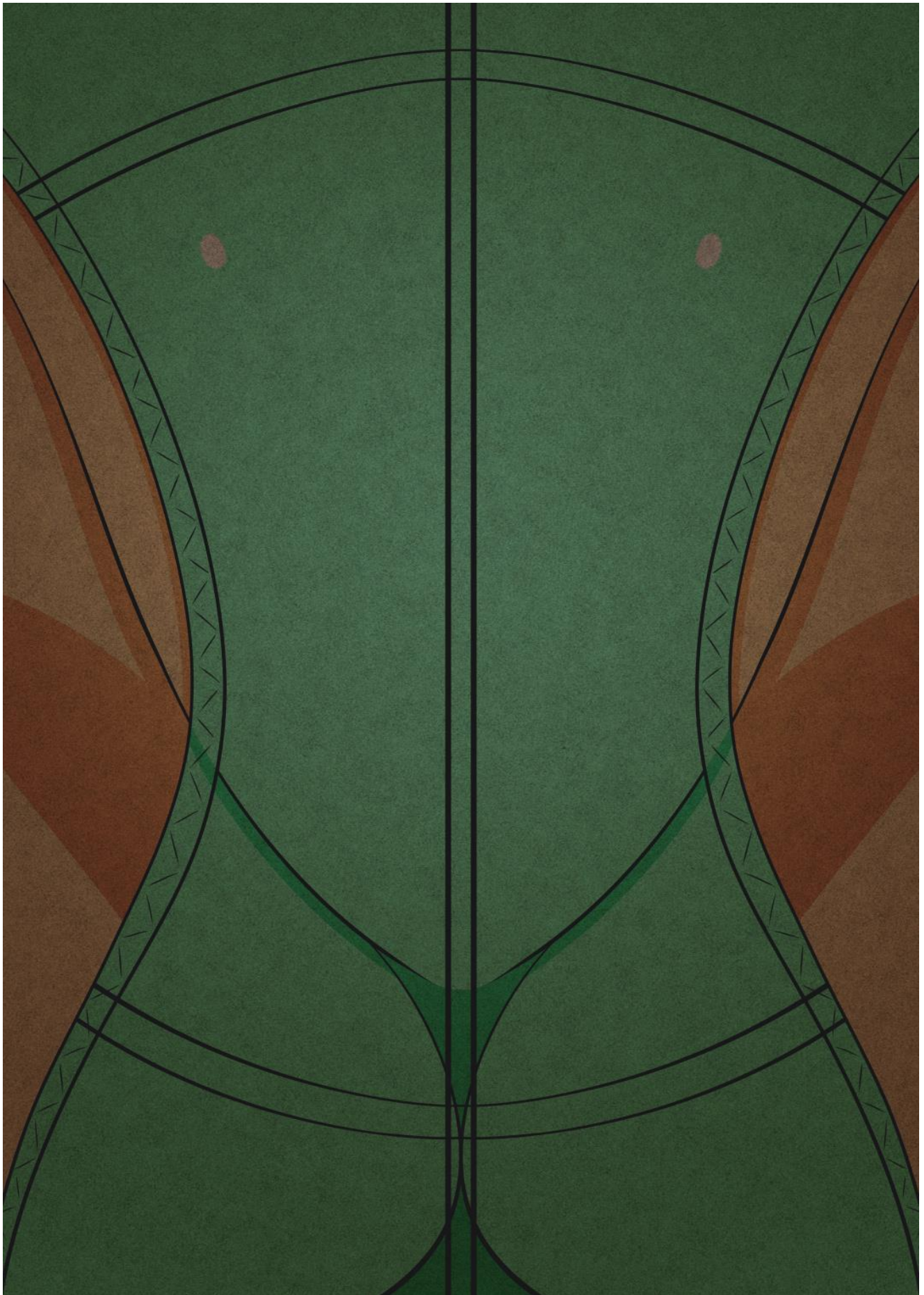
私は宙に浮いた足をジタバタさせるが、全く効果はない。

「あ……がっ……!」

「フハハ……しばらく眠ってな」

意識が遠のいていく……。

そこで私の記憶は途切れた——



「なるほど、帰宅中に襲われた訳ですね。帰りは、いつもその道で？」
誘拐されるまでの道程を話し終えたところで、一息ついた。

「はい……、今まで不審なことは特に無かったのですが……」

治安が悪い地域、というわけでもない。事実、一年近く同じ道を使っていたのだ。

「そうですか、突発的な犯行の可能性がありますね」

「そうですね」

女性の中でも特に小柄な私を狙ったのだろうか？ それぐらいしか思い当たらない。

「その首のアザは、その時の？」

「はい……、病院では一、二週間程度で治ると……」

まだ首には男の指の跡が、クッキリと残っている。

「少なくとも傷害罪では立件できますね」

「はあ……」

裁判のことはよくわからないが、早く犯人が捕まって安心したかった。

「——では、誘拐されてからのことを話して下さい」

「はい……、その後は——」

第三章 廃屋

「んっ……んんう……けほっ……！ けほっ……！」

あれから、どれぐらい経ったのだろうか？ まだ意識がボンヤリしている。

(うっ……うっ……ど、ど、ここ……?)

徐々に意識がハッキリしてきた私は、辺りを見回す。

あの男はいない……。

(は、早く逃げなきゃ！)

そう思い、体を動かそうとするが——

——ジャラッ！ ジャラッ！

(えっ!? し、縛られてるっ!?)

手は後ろ手に縛られ、鎖に繋がれているようだ。

加えて、両足からも鎖が伸びている。

「へへっ……やっど起きたか……」

乱雑に置かれた廃材の影から、あの男が又ツと現れた。

「イ、イヤッ！ 乱暴しないでっ!!」

怯えた私は、そう喚くが、男はジリジリと近づいてくる。

(うっ！ くっ、臭いっ！)

顔を近づけてきた男の息がかかる。

何日も入浴していないのか、全身から肥溜めのような臭いが漂ってくる……。

「ひひっ！ おとなしくしてりゃあ、なにもしねえからよお……」

(なによそれ……こんな所に縛り付けておいて!)

「一体、なにが目的っ！ お金でも欲しいのっ!」

浮浪者のような見た目から、金銭目的かと思っただが、返ってきた答えは予期していないものだった。

「金え？ いいやあ……そんなもんはいらねえ……」

「俺は、見てええんだ……」

(見たい……? 見たいって、なにを——)

おぞましい考えに思い至った私は、身を固くした。

「わ、私の裸が見たいのっ!」

「で、でも、私、貧乳だし、幼児体型だし、見ても面白くないわよ!!」

慌てた私は、変なカミングアウトをしてしまった。

「ふははっ！ そうかい、そうかい」

「でも、俺は裸には興味がねえんだ」

「……俺が見てえのは排便、それも自然排便だ——」

——しばし、思考が固まった。

(? はい……べん……? うん……ち……?)

「なななな、なによそれっ!? 頭おかしいんじゃないのっ!?」
他人の排便シーンを見たいだなんて、私には理解できなかった。

「へへっ! そうかもしれねえなあ……でも見てええんだ!!」
そう言う男は、私の目の前に三脚を立て始めた。
天辺にはカメラが取り付けられる。

「な、なにっ!? まさかそれで撮影をっ!?」
「やだっ! 排泄を見られた上に、撮影までされるなんてっ!」
「いいやあ……もっと、面白えもんだ……」

——カシャン

カメラの隣に、ノートパソコンが置かれた。

画面には、縛られた女……私だ。遠くて読めないが、映像の上に文字が流れている。

「へへ……女の排便を見てえのは、俺だけじゃねえんだ……」

「このカメラはウェブカメラってやつでさあ……インターネットに配信できるわけよ」
「!? じゃあ、この映像って!?」

「ふへへ……、まだ配信開始したばっかだから、人が集まってねえが、段々増えてくるぜえ……」
「うそ……なんで……」

「で、でも、見る人がいるってことは……!」

「だ、誰か助けてっ! 見てるんでしょっ!」

「誰でもいいから、通報してくれればっ!」

「へへ……、そんなことしても無駄さ」

「この裏サイトには、好きモノしかいねえからなあ……」

「楽しみをふいにしてまで、通報するわけがねえ」

「そんな……、誰も助けてくれないの……?」

「じゃあ、これからじっくり見てやるからなあ……フヒヒッ!」

「イヤッ! イヤアッ! 誰か助けてえッ!!」

これが長い、恥辱の日々が始まりでした——



— 続きは製品版でお楽しみ下さい。